



殻を破り次の世界へ

校長室便り

R5年度 No.9

7月20日発行



“子育ては加点法で”



今日で1学期が終わります。子どもたちは通知表を持って帰ります。この通知表はとても大切なものです。子どもたちの1学期の頑張りが記録されているからです。国語や数学などの教科の現状、学校での生活や係活動の様子などが書かれています。子どもと一緒に通知表を見て、まずは、1学期の間にできるようになったことをほめてやってほしいと思います。そして、課題については、子ども自身がどうしていくかを考えるようじっくり話を聞いてやってほしいと思います。大事なことは「減点法ではなく加点法」で関わることだと思います。減点法で考えるようになると、理想の完璧な姿から、まだこれもこれもできていないとなります。そうすると、懸命に頑張って達成できたことがあるのに、達成できなかったことが意識されて、常に後悔してしまい、ついには心が折れてしまうことがあります。子どもが頑張って達成できたことは、少しのことでも認めて褒めていく「加点法」で考えるようにしてほしいと思います。子どもは認められたり褒められたりして、自分の取り組んだことの達成感を味わい、自信や意欲を持ちます。この積み重ねにより、自分の強みや良さを自覚することになります。そして、自尊感情や自己肯定感が養われていきます。

私は、主に中学校で36年間勤務しました。大規模校、中規模校、小規模へき地校、荒れた学校、勉強に熱心な学校、色々な学校で勤務して、子どもや保護者と関わってきました。子どもの思い、保護者の願いなどを聞いてきました。子どもの思いと保護者の願いがほぼ一致している親子は、子どもに「加点法」で関わっている場合がほとんどでした。三者面談で幾度も体験したことですが、保護者が「加点法」で関わっている場合は、子どもが中学生の思春期であるにも関わらず親子の会話が温かい雰囲気の中で交わされていて、和やかに話し合いが進みました。ギクシャクしている親子も、保護者が「加点法」で子どもの取り組みを認めるようになると、一気に無理ですが、徐々に関係が改善されて行く場合が多かったと思います。保護者には素直に言わないことが多いですが、担任である私には「最近、親が少し面倒でなくなってきた。」などと言うことが結構ありました。

通知表や成績表を見ると、どうしてもできていないことに目が行きます。そして、叱ってしまいます。しかし、まずは頑張ったことを認めて褒める「加点法」で子どもに関わってみてはいかがでしょうか。